（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

歩いてきた道

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　38

全てがつながりストーリーに

小学校（あるいは幼稚園）から高等学校までそのカリキュラムを履修する生徒は、二つの軸を持った枠組みの中で学んでいる。一つは「学年」という時間の軸、もう一つは「教室」という場所の軸である。だから、生徒は進級とともに毎年違う教室に移動することになる。校舎の設計によってその動きの方向は違うが、私が1965年からギムナジウムの勉強を続けていた神言会のザンクト・ウェンデルの校舎は面白いレイアウトになっていた。一階の長い廊下に沿って、我々は学年毎に一教室ずつ進み、最終学年の教室は休憩の時間等に全ての生徒が使う出口の側にあった。私は3年弱しかいなかったが、初年度にあたる5年生からこの学校にいた生徒は、最終学年の教室の前を通る度、「あと○年たったら、俺もここで…」と考えていたに違いない。

ギムナジウムを卒業した後の教室。後片付けしないままで学校を去るのは長年の習わし

ところで、このザンクト・ウェンデルを卒業する学年には一つの特権があった。ここでは一年間使った教室をきちんと掃除してから後輩に明け渡すことが原則となっていたが、卒業生だけが何も片付けないで、いらない物を散らかしたまま教室に残して、学校を後にするのである。換言すれば、自分が片付けることができなかった問題、手をかけるのが面倒くさくなった課題を、何も整理しないまま後輩に押しつけることが先輩の特権であった。

その時々の私は、深く考えることなしに、忠実に（後輩と卒業生の）両方の役を演じた―"My Way"と言っても、私はその時その場の流れに沿って先に進んだだけである。しかし、この「マイウエイ」を文章にするに当たって、久しぶりに昔の色々な写真を見て一つの実感が湧いてきた。自分の道は実は"Our Way"Logging"であった、と。その時その時は必ずしも意識していたことではないが、今持っている経験を踏まえて振り返ってみれば、関係のない出来事（乳母車とマラソンとマイクロバスの運転等）は、一貫性を帯びたストーリーに見えてくるのである。このようなストーリーは半分以上フィクションだと言われるかもしれないが、自分が歩いて（走って、運転して）きた道となると、史実・事実だけでつかめない、言葉では言い表せない側面を持ったものであったと、私は思うのである。

（おわり）

次回からは東海住宅建設産業協会理事長の馬場研治さんです。